

紹介

A.B. ベズルコフ, Г.Т.ジュラブレフ, B.E.ポレタエフ, Л.В.ルチェス, B.A.ウスチノフ: 「1938, 1969年の社会学的調査資料にもとづくコルホーズ青年の社会的様相」 1976

保 坂 哲 郎

はじめに

ソ連の農村における青年層の社会・経済的変動に関して大きな関心がよせられている。最近のソ連邦共産党大会においては、都市と農村の格差の解消、農業の労働生産性向上＝基幹的農業労働力の確保、の視点からの農村青年に対する政策が重要視されているし、他方、社会学的研究などにおいても、農村青年の都市への流出などを中心にした研究で多くの成果が生みだされつつある。

最近の日本におけるソ連社会主義研究においても、農村の基幹的労働力＝メハニザートル層を中心とした青年層の都市志向、都市への流出が現在のソ連農業を「解決しがたい」、被保護部門たらしめている重要な要因である、という中山弘正氏の問題提起もなされている。

ソ連農村青年層の政治経済的様相は、以上の諸問題にとどまらず、ソ連の民主主義の発展、共産主義への主体形成の問題としても重要な意味をもつといえるだろう⁽¹⁾。

ソ連農村青年層の具体的様相の一面を今回紹介する著書は示しており、以上の問題点を念頭におきつつ紹介してみたい。

I. 調査資料について

序章と第1章「コルホーズ青年の社会的様相研究のための大量の歴史的史料としての社会学的研究資料」において、今回の調査資料の性格、内容が説明されている。

まず、研究対象としての青年問題について。社会主義、共産主義の建設における青年の役割は大きな意義をもち、これまで、この点をテーマにした研究成果も出されてきているが、一連の社会学的研究の史的基礎は(地方的、短期的で)あまりにも狭隘であった。さらに、農村青年に関しても「今日の農村青年」(1972)のような研究成果が公表されているが、広範な資料を利用していながら、青年層の社会的区分をせず不十分な分析に終っている、と現在の研究状況を一瞥したのち、これらの不十分性を補完する意義が今回

の資料にあるという。

1920年代後半から、党と政府は農村・農業変革のためにコムソモール員を大量に農村に派遣し文化・政治的活動にあたらせる。このような活動と20年代から30年代にかけての農業集団化による農業構造変革の影響がコルホーズ青年層の社会的様相に対してどのように作用しているかを調査したのが「1938年調査」である。この調査はコムソモール中央委と Gosplan 国民経済計算中央管理局のもとで、主要農業地帯を代表する州（モスクワ、クルスワ、ハリコフ、ボルタヴァ、ロストフ、オムスク、ゴメリスク）の典型的なコルホー

表1. 1938, 1969年のコルホーズ青年の文化と生活

＜ 1 9 3 8 年 調 査 ＞				
質	問	返 答 の 選 択 肢	返 答 率	返 答 数
1. 州		1. モスクワ	4.8	5,127
		2. クルスワ	12.1	
		3. ハリコフ, ボルタヴァ	38.4	
		4. ロストフ	18.5	
		5. オムスク	17.0	
		6. ゴメリスク	9.2	
2. 性		1. 男性	48.0	5,127
		2. 女性	52.0	
3. 年 令		1. 15—16	16.0	5,095
		2. 17—18	26.2	
		3. 19—20	11.9	
		4. 21—22	22.4	
		5. 23—24	15.8	
		6. 25以上	7.7	
4. コムソモール員であるか		1. コムソール員	22.8	5,094
		2. コムソール員候補	0.6	
		3. コムソール員でない	76.6	
5. 共産党員であるか		1. 党員である	0.1	4,908
		2. 党員候補	0.4	
		3. シンパ	0.2	
		4. 党員でない	99.3	
6. コルホーズ, MTCで何の仕事をしているか		1. コルホーズ代表	0.1	4,888
		2. トラクター班班長	0.6	
		3. トラクター手	7.6	
		4. コンバイン手	1.0	
		5. 刈取機運転手	0.8	

ズの青年（基本的に15～25才）5100人以上を対象にアンケート調査を行ったものである。この調査資料はあまり分析、利用はされなかった。

この時期以降の農業、農村の大きな変化の程度を明らかにし、コルホーズ青年の様相をさぐったのが「1969年調査」である。コムソモール中央委、ソ連邦歴史研究所のもとで、1938年とほぼ同地域のほぼ同意義をもつコルホーズの青年層5400人にアンケート調査を行った。この2調査の質問内容と回答分布は第1表のようである（全項目ではない。欠落部分は当時と現在の政治的状況のちがいでによるものかもしれない）。

＜ 1 9 6 9 年 調 査 ＞				
質 問	返 答 の 選 択 肢	返 答 率	返 答 数	
1. 州	1. モスクワ	3.2	4,481	
	2. クルスク, ペロゴロド	10.2		
	3. ハリコフ, ポルタヴァ, チェルカス	40.2		
	4. ゴメリスク	13.2		
	5. ロストフ	17.6		
	6. オムスク, チュメンスク	15.6		
2. 性	1. 男 性	52.5	4,333	
	2. 女 性	47.5		
3. 年 令	1. 15—16	5.1	4,510	
	2. 17—18	13.7		
	3. 19—20	15.9		
	4. 21—24	25.4		
	5. 25—28	22.1		
	6. 29—30	17.8		
4. コムソモール員であるか	1. コムソモール員	61.9	4,019	
	2. ちがう	38.1		
5. 共産党員であるか	1. 党 員	10.2	3,035	
	2. 党員候補	6.2		
	3. 党員でない	83.6		
6. コルホーズで何の仕事 をしているか	1. コルホーズ代表	0.3	4,281	
	2. トラクター班班長	1.0		
	3. トラクター手	16.0		
	4. コンバイン手	3.2		
	5. コンバイン助手	1.6		
	6. 自動車運転手	12.0		

＜ 1938 年 調 査 ＞			
質 問	返 答 の 選 択 肢	返 答 率	返 答 数
	6. 自動車運転手	0.7	
	7. 機械技手	0.1	
	8. 機械技師	0.3	
	9. 耕種作業班班長	0.8	
	10. 畜産 " "	0.2	
	11. 畜産農場主任	0.2	
	12. 家畜番	1.0	
	13. 馬 丁	1.2	
	14. 搾乳・牛番	1.7	
	15. 会計係	0.1	
	16. 簿記係	1.0	
	17. 簿記助手	0.8	
	18. 文化・生活部門主任	0.8	
	19. コルホーズの雑役	81.0	
7. スタハーノフ運動者であるか	1. はい	14.9	5,063
	2. いいえ	85.1	
10. 突撃作業班員であるか	1. はい	21.1	4,984
	2. いいえ	78.0	
12. 読み書き	1. 読み書く	95.0	4,981
	2. 読 む	1.6	
	3. 文 盲	3.4	
13. どのような学校で学習したか	1. 初等学校(4)		4,716
	2. 準中学校(7)		
	3. 中学校(9)		
	4. 工場附属工業学校	1.3	
	5. 農村中学校(7)	0.2	
	6. 技芸学校	1.1	
	7. 師範学校	0.8	
	8. コルホーズ青年学校	0.3	
	9. 大学予備校	0.3	
	10. 高等専門学校	0.5	
14. 学校を終了したか	1. はい	36.7	4,659
	2. いいえ	63.7	
15. もし終了しないならどの級を終了したか	1. 2 級	19.6	2,958
	2. 3 "	19.5	
	3. 4 "	12.0	

＜ 1969 年 調 査 ＞				
質	問	返 答 の 選 択 肢	返 答 率	返 答 数
		7. 機械技師	1.1	
		8. 耕種作業班班長	1.0	
		9. 畜産作業班班長	0.8	
		10. 畜産農場主任	1.2	
		11. 家畜番	3.0	
		12. 馬 丁	1.0	
		13. 搾乳・牛番	14.2	
		14. 文化・生活部門作業	9.2	
		15. 雑 役	19.4	
		16. 農業技師	1.7	
		17. 畜産学者	2.0	
		18. 技 師	0.8	
		19. 技 手	1.2	
		20. 旋盤工	1.0	
		21. 小鍛冶工	2.3	
		22. 電気技手	2.0	
		23. 農事指導員	4.0	
		24. 獣医業	0.0	
		25. 経済担当者	0.0	
		26. 会計係	0.0	
7.	仕事に満足しているか	1. 完全に満足している	69.3	4,427
		2. まあまあ満足している	13.5	
		3. 無関心	8.4	
		4. やや不満足	5.6	
		5. 全く満足していない	3.2	
10.	他の仕事に移りたいか	1. は い	23.6	4,100
		2. いいえ	64.9	
		3. わからない	11.5	
11.	（「はい」の場合） 労働転換は農村流出と結 びついているか	1. は い	27.9	2,173
		2. いいえ	72.1	
12.	社会主義競争に参加し ているか	2. は い	57.1	3,592
		3. いいえ	42.9	
13.	共産主義労働突撃隊員 か	1. は い	14.4	3,111
		2. いいえ	85.6	
14.	ソビエト軍に勤めたか	1. は い	33.1	3,522

＜ 1938年調査＞				
質	問	返 答 の 選 択 肢	返答率	返答数
		4. 5 "	19.3	
		5. 6 "	16.3	
		6. 7 "	3.9	
		7. 8 "	9.4	
16.	高等専門学校どの学年を終了したか	1. 2学年	74.5	55
		2. 3 " "	25.5	
17.	1938年にどこで学習しているか	1. 高等専門学校あるいは技芸学校	3.3	4,999
		2. トラクター手, コンバイン手コース	2.2	
		3. 農業動物学コース, 班長コース	0.3	
		4. 成人のための中等学校, 大学予備校	3.4	
		5. 他の学校, コース	6.9	
		6. 学習していない	83.9	
20.	社会的活動	1. コムソモールオルグ, コムソモール委書記	0.8	4,938
		2. コムソモールメンバー	0.9	
		3. コルホーズ幹部員	0.3	
		4. 監査委員会メンバー	0.3	
		5. 壁新聞編集局員	4.4	
		6. 労働組合オルグ	0.1	
		7. ピオネール隊指導者	0.8	
		8. アジテータ, 宣伝者	2.2	
		9. 国防飛行化学建設後援会メンバー	1.5	
		10. していない	88.7	
21.	個人, 家族用に楽器を所有しているか	1. ラジオ	24.4	2,854
		2. 蓄音器	7.2	
		3. ギター, マンドリン, パラライカ	47.4	
		4. アコーディオン	10.3	
		5. その他	10.7	
22.	次の文化・スポーツ用品をもっているか	1. 写真機	1.4	7,876
		2. 自転車	8.4	
		3. スキー	11.4	
		4. スケート	17.2	

＜ 1969 年 調 査 ＞				
質	問	返 答 の 選 択 肢	返 答 率	返 答 数
15.	どのような学校で学習したか	2. いいえ	66.9	5,516
		1. 初等学校(4)	2.1	
		2. 準中学校(7-8)	34.3	
		3. 中等学校(10-11)	25.9	
		4. 農業専門-技術学校	10.1	
		5. 技芸学校	10.7	
		6. 養成所(コース)	13.6	
		7. 高等専門学校	3.3	
16.	学校を終了したか	1. はい	58.1	
		2. いいえ	41.9	
17.	もし終了しないならどの級を終了したか	1. 2 級	0.8	1,891
		2. 3 "	1.9	
		3. 4 "	3.6	
		4. 5 "	4.7	
		5. 6 "	5.6	
		6. 7 "	27.9	
		7. 8 "	55.5	
20.	高等専門, 技芸学校のどの級を終了したか	1. 2 級	45.9	344
		2. 3 "	54.1	
21.	現在(1969年)どこで学習しているか	1. (通信教育も含めて) 高等専門学校	5.6	3,134
		2. (通信教育も含めて) 技芸学校	6.8	
		3. コース(トラクター手, コンバイン手, 農業畜産)	6.9	
		4. その他の学校コース	5.3	
		5. 学習していない	75.4	
22.	自分の本をもっているか	1. 社会・政治文献	9.9	8,910
		2. レーニン全集	10.6	
		3. 農業, 技術文献	18.8	
		4. 芸術作品	37.8	
		5. その他	22.9	
23.	どのような社会的活動をしているか	1. コルホーズ幹部員	4.2	3,082
		2. 監査委員会メンバー	2.2	
		3. 班ソビエトメンバー	5.2	
		4. 農業ソビエト代表	10.2	

＜ 1938 年 調 査 ＞				
質 問	返 答 の 選 択 肢	返 答 率	返 答 数	
23. 自分の本もっているか	5. 将 棋	5.2	11,057	
	6. 時 計	36.5		
	7. 獵 銃	5.9		
	8. 西洋碁	14.0		
	1. 社会, 政治文献	14.8		
	2. レーニン全集	10.2		
	3. 農業, 技術文献	15.3		
	4. 芸術作品	21.2		
24. 図書館の本を利用するか	5. その他の本	38.5	5,060	
	1. はい	55.7		
25. 次の著作を読んだか	2. いいえ	44.3	45,096	
	1. 科学的共産主義の創始者の著作(コムソモール第3回大会のレーニン演説,「共産党宣言」)	6.8		
	2. A. プーシキン「エフゲーニオネーギン」	4.7		
	3. プーシキンの他の著作	6.7		
	4. M. レールモントクの詩	5.3		
	5. H. ゴーゴリ「死せる魂」	4.1		
	6. ゴーゴリの他の著作	5.1		
	7. T. シェフチェンコの詩	6.5		
	8. H. ネクラソフの詩	6.0		
	9. N. ツルゲーネフの作品	5.0		
	10. A. ゴンチャロフ「オブローモフ」	2.6		
	11. JI. トルストイの「戦争と平和」	1.8		
	12. M. ゴーリキー「母」	5.5		
	13. ゴーリキーの他の著作	5.9		
	14. B. マヤコフスキーの詩	3.7		
	15. A. セラフィモヴィッチの「鉄の流れ」	3.2		
	16. A. フリマノフの「チャパーエフ」	6.7		
	17. M. ショーロホフの「開かれた処女地」	4.5		
18. A. トルストイの「ピョートル一世」	3.6			

＜ 1969 年 調 査 ＞				
質	問	返 答 の 選 択 肢	返 答 率	返 答 数
24. 次の文化、スポーツ用品ももっているか		5. コムソモール委員会メンバー	18.5	17,247
		6. 人民監視員	9.1	
		7. 同志裁判メンバー	3.3	
		8. 臨時的な委託を遂行	42.8	
		9. その他	4.5	
		1. テレビ	12.5	
		2. ラジオ、トランジスター	16.4	
		3. プレーヤ、テープコーダー	5.6	
		4. ピアノ	0.5	
		5. アコーディオン	5.6	
		6. その他の楽器	2.2	
		7. 写真機	5.0	
		8. 自転車	16.8	
		9. オートバイ、スクーター	6.9	
	10. スケート、スキー	8.5		
	11. スピーカー	11.1		
	12. 将 棋	8.9		
25. 次の著作を読んだか		1. コムソモール第3回大会のレーニン「青年同盟の任務」	4.6	47,895
		2. レーニンの他の著作	3.5	
		3. 「共産党宣言」	3.5	
		4. A. プーシキン「エフゲーニオネーギン」	7.0	
		5. ゴーゴリの「死せる魂」	7.0	
		6. トルストイの「戦争と平和」	7.4	
		7. ゴーリキーの「母」	7.2	
		8. A. フルマノフの「チャパーエフ」	7.1	
		9. M. ショーロホフの「開かれた処女地」	7.8	
		10. M. ショーロホフの「静かなドン」	7.4	
		11. H. オストロフスキーの「鋼鉄はいかに鍛えられたか」	8.1	

＜ 1938年調査＞				
質	問	返 答 の 選 択 肢	返 答 率	返 答 数
		19. A. トルストイ「穀物」	1.8	
		20. M. ショーロホフ「静かなドン」	4.3	
		21. H. オストロフスキー「鋼鉄はいかにきたえられたか」	6.2	
26.	壁新聞の他に新聞を恒常的に読んでいるか	1. はい	70.3	5,090
		2. いいえ	29.7	
27.	社会、政治文献を読んでいるか	1. はい	55.8	5,096
		2. いいえ	44.2	
30.	芸術作品を読んでいるか	1. はい	67.1	5,113
		2. いいえ	32.9	
	1973年に次のものに行ったか			
31.	劇場、コンサート、サーカス	1. 1—10回	84.9	3,741
		2. 11—25回	12.4	
		3. 26回以上	2.7	
32.	映 画	1. 1—15回	12.4	4,883
		2. 16—30回	22.2	
		3. 31回以上	15.4	
33.	講 演（教育以外の）	1. 1—3回	52.5	1,974
		2. 4回以上	47.5	
34.	スポーツ競技	1. 1—2回	28.1	1,205
		2. 3回以上	71.9	
35.	博物館、展覧会	1. 1—3回	80.5	1,095
		2. 4回以上	19.5	
36.	次の映画を観たか	1. 「10月のレーニン」	15.2	23,653
		2. 「チャパーエフ」	1.8	
		3. 「我々はクロンシュタットから」	14.5	
		4. 「バルチックの代表」	6.3	
		5. 「ピョートル一世」	12.5	
		6. 「偉大な市民」	6.4	
		7. 「コムソモーリスク」	4.2	

＜ 1969 年 調 査 ＞				
質	問	返 答 の 選 択 肢	返 答 率	返 答 数
		12. A. ファデエフの「若い親衛隊」	7.7	
		13. B. ボレホフの「現代人の物語」	7.6	
		14. A. トバルドフスキーの「バシリー・チュルキン」	6.4	
		15. K. シモノフの「兵士として生れず」	4.2	
		16. J. レオノフの「ロシアの森」	3.5	
26.	図書館の本を利用したか	1. はい	83.5	3,988
		2. いいえ	16.5	
27.	通常読んでいる新聞、雑誌の名をあげよ	1. 「プラウダ」	9.4	9,385
		2. 「コムソモーリスカヤ・プラウダ」	10.2	
		3. 「イズベスチャ」	6.8	
		4. 「農村生活」	14.0	
		5. 州、地区の新聞	28.6	
		6. 雑 誌	31.0	
30.	最も好きな文芸作品の名をあげよ	1. ロシア古典	13.4	
		2. ソビエト文学	79.5	
		3. 外国文学	7.1	
31.	年間に読んだ本の冊数	1. 0	19.8	3,741
		2. 1—2冊	60.1	
		3. 3—5冊	17.3	
		4. 6冊以上	2.8	
32.	規則的に新聞や雑誌を読むか	1. 恒常的に読む	72.7	4,353
		2. 時々読む	24.6	
		3. 読まない	2.7	
33.	文学をとくに読むか	1. いつも読む	48.9	3,918
		2. 時々読む	24.7	
		3. 読まない	26.4	
34.	次の映画を観たか	1. 「10月のレーニン」	8.4	37,008
		2. 「母の愛」	8.2	
		3. 「7月6日」	7.0	
		4. 「ポーランドのレーニン」	6.8	
		5. 「10月」	5.4	
		6. 「コムニスト」	7.6	

＜ 1938年調査＞				
質	問	返 答 の 選 択 肢	返答率	返答数
		8. 「幼時のゴーリキ」	7.1	
		9. 「豊かな娘」	9.8	
		10. 「マクシムの青年時代」	12.1	
37.	サークルに参加しているか	1. 体 育	17.9	
		2. 演 劇	16.0	
		3. 音楽, 合唱, オーケストラ	21.1	
		4. 文 学	14.4	
		5. 絵 画	2.9	
		6. 農業動物技術やその他の技術	8.6	
		7. パラシュート	0.8	
		8. 軍 事	18.3	
40.	体力測定基準チェックにパスしたか	1. 第一級にパス	41.2	
		2. 第二級にパス	3.6	
		3. 終了していない	41.0	
		4. 全くパスしていない	14.2	
41.	ボローシロフ射手の基準チェックにパスしたか	1. 第一級にパス	38.3	1,018
		2. 第二級にパス	3.3	
		3. 終了していない	31.0	
		4. 全くパスしていない	27.4	
42.	防空防毒基準チェックにパスしたか	1. し た	72.1	962
		2. していない	27.9	
43.	保健衛生整備チェックにパスしたか	1. し た	58.4	998
		2. していない	41.6	
44.	スキー, スケートに乗るか	1. スケート	46.7	4,388
		2. スキー	53.3	
	1937年の社会化経営からの収入はどれくらいか			
45.	1937年に次の労働日を稼ぐ	1. 0	19.6	5,060
		2. 20まで	3.1	
		3. 21-50	7.3	
		4. 51-100	9.6	
		5. 101-200	20.6	

＜ 1969 年 調 査 ＞				
質	問	返 答 の 選 択 肢	返 答 率	返 答 数
		7. 「コムニストの息子」	5.0	
		8. 「議長」	9.5	
		9. 「チャパーエフ」	10.3	
		10. 「ビリネヤ」	7.6	
		11. 「会戦」	7.7	
		12. 「月曜日まで生きよう」	6.6	
		13. 「戦争と平和」	9.9	
35.	クラブに参加しているか	1. 政治教育	34.3	
		2. スポーツ	17.2	
		3. 演 劇	11.9	
		4. 音楽, 合唱, オーケストラ	22.7	
		5. 文学, 絵画	3.1	
		6. 農業畜産技術, その他の技術	6.2	
		7. 空 航	1.5	
		8. 軍 事	1.6	
		9. その他	1.5	
	1968年の観劇等			
36.	演劇, コンサート	1. 1-10回	81.0	2,974
		2. 11-25回	10.6	
		3. 26回以上	8.4	
37.	映 画	1. 1-15回	26.0	4,344
		2. 16-35回	22.5	
		3. 36回以上	51.5	
40.	講 演	1. 1-3回	65.9	3,181
		2. 4回以上	34.1	
41.	博物館, 展覧会	1. 1-3回	75.4	1,752
		2. 4回以上	24.6	
42.	スポーツ競技	1. 1-2回	61.1	1,568
		2. 3回以上	38.9	
43.	年間にコルホーズ, コムソモールの集会に参加したか	1. 2回以上	34.2	3,572
		2. 1回	22.2	
		3. 参加しない	43.6	
44.	体力測定基準, Γ3Pをチェックしたか	1. 第一級をチェック	21.8	2,449
		2. 第二級を "	27.6	

＜ 1938 年 調 査 ＞				
質	問	返 答 の 選 択 肢	返 答 率	返 答 数
46. 労働日に対して受取る : 穀物 (ツェントネル)		6. 201-400	34.1	5,067
		7. 401-600	4.7	
		8. 601以上	1.0	
		1. 0	24.1	
		2. 1まで	5.2	
		3. 1.1-3	10.7	
		4. 3.1-5	8.7	
		5. 5.1-10	2.9	
47. 馬れいしょ (ツ)		6. 15.1-20	1.5	5,065
		7. 20.1-40	2.3	
		8. 40.1以上	0.3	
		1. 0	55.3	
		2. 1まで	10.8	
		3. 1.1-5	19.8	
		4. 5.1-10	7.1	
		5. 10.1-15	2.9	
50. 野 菜 (ツ)		6. 15.1-20	1.5	5,066
		7. 20.1-40	2.3	
		8. 40.1以上	0.3	
		1. 0	77.0	
		2. 1まで	7.6	
		3. 1.1-3	9.3	
		4. 3.1-5	3.4	
		5. 5.1-10	2.2	
51. 貨 幣 (ルーブリ)		6. 10.1-20	0.4	5,064
		7. 20.1以上	0.1	
		1. 0	20.9	
		2. 50まで	12.0	
		3. 51-100	11.6	
		4. 101-150	8.1	
		5. 151-200	6.5	
		6. 201-500	22.6	
	7. 501-1000	10.9		
	8. 1001以上	7.4		

＜ 1969 年 調 査 ＞				
質	問	返 答 の 選 択 肢	返 答 率	返 答 数
社会化経営からの1968年の収入	45. 貨 幣 (ルーブル)	3. 終了していない	18.3	4,474
		4. スポーツ等級をもつ	32.3	
	46. 穀 物(ツェントネル)	1. 0	3.4	
		1. 100まで	7.1	
		3. 101-150	2.8	
		4. 151-200	1.3	
		5. 201-300	2.1	
		6 301-400	3.8	
		7. 401-500	6.4	
		8. 501-700	15.7	
		9. 701-1000	31.0	
10. 1001-1500		21.3		
47. 馬れいしょ (ツェントネル)	11. 1501以上	5.1		
	46. 穀 物(ツェントネル)	1. 0	24.2	2,163
		2. 1まで	5.0	
		3. 1.1-3	9.0	
		4. 3.1-5	13.2	
		5. 5.1-10	19.8	
		6. 10.1-20	9.3	
		7. 20.1-40	5.8	
		8. 40.1-60	3.6	
		9. 60.1-70	4.0	
		10. 70.1-80	2.6	
47. 馬れいしょ (ツェントネル)	11. 80.1以上	3.5		
	50. 野 菜(ツェントネル)	1. 0	70.1	1,005
		2. 1まで	8.1	
		3. 1.1-5	9.6	
		4. 5.1-10	4.6	
		5. 10.1-15	3.7	
		6. 15.1-30	1.4	
7. 30.1以上	2.5			
50. 野 菜(ツェントネル)	1. 0	75.3	956	
	2. 1まで	7.2		
	3. 1.1-3	6.0		

＜ 1938年調査＞				
質	問	返 答 の 選 択 肢	返 答 率	返 答 数
52.	その他、コンバイン手として1937年に収入を得る（ループル）	1. 500まで	16.7	49
		2. 501—1000	58.3	
		3. 1001—2000	16.7	
		4. 2001—3000	8.3	
		5. 3001以上	0.0	

II. 「第2章職業—生産構造, 第3章教育」

ここではコルホーズ青年の職業・職種構造や教育水準の変動が分析されている。

まず、1938年の職種構造の特徴について次のようにのべる。（表1に見られるように）この時期の職種構造はメハニザートル＝10.6(10.5?)%, 農業固有の労働＝4(3.9?)%, 行政・管理機関者＝2.5%, サービス執行労働（畜産農場主任も含まれるようである）＝2%, 知識労働＝0.1%, 雑役＝81%であり、一面では、工業部門労働者の職種の労働性格に近似した職種や国家企業や機関に就業している労働者の型に似た職種を生みだしているが、他面では、この過程は開始されたばかりであり、農業労働職種構造に重要な影響は与えていない。

次に婦人労働に関していうと、(1)管理部門への進出が見られる（耕種・畜産作業班長において36.6%, 文化・生活機関管理者において40%, 会計係において37.3%等）、(2)メハニザートル部門への進出のおくれがある（トラクター手＝10.7%, コンバイン手＝14.3%, 自動車運転手＝17.6%）、(3)農業固有の労働においては伝統の名残が見られ婦人の比率が高い（家畜番＝22.9%, 搾乳＝98.8%等）。

1969年段階でこれらの点に関して次の特徴づけが与えられる。

まず、労働の内容、性格、構造がより工業労働者のそれに近づいている。38年調査段階では記録されなかった新職種として(1)エンジニア・技術労働者や農業技師や畜産学者のよ

＜ 1969 年 調 査 ＞				
質	問	返 答 の 選 択 肢	返 答 率	返 答 数
51. 両親の教育水準		4. 3.1—5	3.9	
		5. 5.1—10	2.9	
		6. 10.1—20	2.6	
		7. 20.1以上	2.1	
		1. 2 級	20.5	
		2. 3—4 級	30.1	
		3. 5—6 級	21.1	
		4. 7—9 級	18.5	
		5. 10 級	5.4	
		6. 技芸学校、高等専門学校	4.4	
52. 両親の党員性		1. 父が共産党員	8.7	7,229
		2. 母が共産党員	1.8	
		3. 父が非産党員	36.9	
		4. 母が非産党員	52.6	

うな知識労働者、(2) (旋盤工, 小鍛冶工, 電気技手のような) 労働の内容, 性格の点で有資格工業労働者に近似したコルホーズ員, がある。(1)グループの比率は5.7%で大きくはないが, コルホーズ農村に確実にはいりこんでおり, 都市と農村, 農業と工業労働の格差解消の表われともなっている。38年から69年への職種の内構変化をみると, トラクター手=7.6→16%, コンバイン手=1→3.2%, 自動車運転手=0.7→12.0%, 雑役=81→19.4%, マシニスト=4倍と変化しており上述の傾向が示されている。

次に農業固有の労働, 畜産(家畜番, 馬丁, 搾乳・牛番)と農事指導員の労働者の比率が増大している。69年には全コルホーズ青年の22.2%(畜産=18.2%, 農事指導員=4%)をしめ, 強力な社会的層となっている。また, これらの労働のうち機械化された部分はますます多くなっている。

職員層に関する特徴をいうと, (1)会計係はより年配層の職種となり青年層に該当しない, (2)行政・管理機関の職員の比率は2.5→4.5%へ増大している, (3)文化・生活機関の職員の比率が9.2%をしめており, 都市, 農村の生活水準接近のあらわれといえる。

さらに非常に重要な特徴として職種兼任(Совмещение Профессий)の発展を指摘することができる。第2表に見られるように, 工業にくらべれば遅れているとはいえメハニザートル層にとくに普及しているといえる。

次に婦人準働に関しては次の点が指摘できる。(1)行政・管理職, 専門性を有する職への進出が増大したこと(コルホーズ代表職の青年において婦人の比率は25.6→35.2%へ増

表2 農業生産に直接に従事している労働者の1969年の職種兼任者の比率(総計に対する%)

トラクター手	18.4
コンバイン手	66.5
コンバイン助手	25.0
自動車運転手	14.4
機械技師	22.6
旋盤工	20.8
小鍛冶工	38.6
電気技手	29.3
家畜番	8.6
馬丁	11.0
農事指導員	10.0

大、耕種・畜産作業班長においても36.6→53.7%へ増大、専門性をもつ職種に関しても、畜産学者のうち70.1%、農業技師のうち54.8%、技師=27.1%、技手=24.6%を婦人がしめている)、(2)他面、メハニザートルにおける婦人の進出に関しては後退的な面が見られる(トラクター手=10.7→7.2%へ、コンバイン手=14.3→5.4%へ、コンバイン助手=31.7→6.4%へ、自動車運転手=17.6→3.6%へと、それぞれ婦人の比率は後退している)。

次に教育に関する諸問題について⁽²⁾。

まず、38年の調査結果は次のことを示している。(1)農村において文化的にもっとも先進

的な青年層において、文盲、半文盲は3.4%、1.6%を構成する。性別にみると女性は男性にくらべて文盲において4倍、半文盲において2倍も多い。年令別には、これらの過半数は23才以上で、全体的な義務教育実施以前の年令層である。職種別にみると、文盲、半文盲の主要職種グループは搾乳・牛番=11.6%、家畜番=4.2%、馬丁=3.2%、雑役=5.7%、などであり、耕種作業班班長にも存在する。(2)基本的な学校の種類は初等(4年制)と準中等(7年制)学校であり、86.8%の青年が両者の学校で学んでいる。残りは、10.8%の青年が9年制、2.4%が諸種の専門学校で学んでいる。職種別にみると教育水準のちがいが見られるが、これは当該職種の複雑さと年令とが関連している。

職員層に関していうと、コルホーズ代表や文化・生活機関責任者の教育水準がもっとも高く(主要部分は7年、一部は9年の教育)、残りのトラクター班、耕種班、畜産班の班長や畜産農場責任者たちは初等学校にとどまっている。

これら青年のどのくらいが当該学校を修了しているか、について具体的に職種別にみると、コルホーズ代表=50%、トラクター班長=52.9%、トラクター手=52.4%、コンバイン手=64.6%、刈取機運転手=53.8、自動車運転手=41.2%、機械手=64.3%、耕種班長=34.6%、畜産班長=45.4%、畜産農場長=63.6%、家畜番=28.3%、馬丁=26.7%、搾乳=32.1%、会計係=80%、会計士=60.8%、会計助手=64.4%、文化・生活機関責任者=43.6%、雑役=34.3%となっており、平均=36.7%、約%は当該学校教育を修了していないという大きな問題点となっている。

学校教育不修了といっても内容的には基本的に2種類あり、(a)準中等教育不修了……2-3年修了、(b)準中等教育不修了……4-6年修了が区分できるわけであるが、この点から修了の程度を職種別に見たのが第3表である。

以上の資料から次の傾向を指摘することができる。(1)メハニザートル層の教育水準は相

表3 職種別の教育修了水準(%, 1938)

職 種	2-3 学年修了	4-6 学年修了
トラクター	36.9	61.9
コンバイン手	22.2	72.3
刈取機運転手	21	79
自動車運転手	10.5	73.7
家畜番	57.3	39.4
馬丁	34.9	59.8
搾乳・牛番	66	30
トラクター班班長	50	50
耕種作業班班長	53.4	46.6
畜産作業班班長	50	50
生活・文化機関責任者	15.8	68.4
会計掛	5	70
会計掛助手	0	68.7
雑役	41.7	46.5

対的に高いこと、(2)対照的に農業に固有な労働に従事する青年の教育水準は低いこと、(3)専門的な作業班責任者の教育水準も低く、労働力編成上の大きな欠陥となっている。

次に69年の教育諸問題についてみてみよう。この時期において(1)文盲、半文盲の問題は解決され、全体的な教育水準は大きく上昇した。教育水準はコルホーズ青年層内部の何らかの社会的グループの特徴的標識ではなく、(学校修了程度もふくめて)職種との直接的対応はなくなっている。ただ、第4表にみられるように、職種の複雑さと一定の対応はまだ見られる。行政・管理機関勤務者の教育水準は大きく向上した。(a)初等学校のこの学習者はほとんどゼロに近づいた。(b)テフニクムや高等教育の学習者の比率が当該グループ内部でも、他グループとの関係でも高くなった。(c)学校修了水準は第5表に見られるように、他職種グループと比較しても高い。(d)学校不修了者のうち2-3学級者はほとんどゼロ(1938年には約50%)となった。しかし、4-6学級者が約5%をしめている点では一連の専門職種に対する遅れはまだ完全には克服されていない。

工業的タイプの労働者、農業固有の労働者に関していうと2つの点が指摘できる。

(1)8-10年制の義務教育が基本的学校教育となったこと、(2)農業職業・技術学校やコースのような専門的教育形態の出現、である。メハニザートル属内部についても、教育水準格差、教育修了水準格差は縮小している。学校教育不修了者の半分以上は8級者である。

耕種、畜産労働者に関していうと、農業職業・技術学校やコースの学習者の比率がメハニザートルと比較すると少なく、義務教育水準も低い。雑役者についても同様のことがいえる。

表4 「どのような学校で学習したか」という問題に関する1969年コルホーズ青年の分布

職 種	初 等 教 育	準 中 等 学 校	中 等 学 校	農 業 職 業 学 校	テフニクム	コース	高等教育
コルホーズ代表	5.5	16.6	22.2	11.4	16.6	5.5	22.2
トラクター作業班班長	1.9	19.2	26.9	15.6	11.5	17.3	7.6
トラクター手	1.9	35.6	15.2	29.6	2.1	15.0	0.6
コンバイン手	2.3	29.3	19.5	20.4	5.3	22.3	0.9
コンバイン助手	1.1	33.3	26.4	24.5	2.2	11.4	1.1
自動車運転手	0.9	29.8	24.8	10.9	3.2	29.9	0.5
機械技師	1.6	30.0	25.0	23.3	6.6	13.5	0.0
耕種作業班班長	1.8	23.6	29.0	3.8	19.9	16.5	5.4
畜産作業班班長	2.1	21.7	26.0	8.6	17.5	21.7	2.4
畜産農場責任者	1.5	33.6	28.7	0.0	25.7	9.0	1.5
家畜番	7.6	54.6	22.5	4.6	2.3	6.9	1.5
馬丁	0.0	39.4	36.9	6.5	4.3	8.6	4.3
搾乳・牛番	3.4	59.9	27.9	2.2	2.8	3.4	0.4
文化・生活機関労働者	0.9	16.7	38.3	2.9	20.2	15.3	5.5
雑役	3.6	47.6	32.0	3.7	3.9	8.1	1.1
農業技師	1.0	6.3	12.7	1.1	43.6	2.4	32.9
畜産学者	1.0	5.2	19.9	1.1	44.2	5.2	23.4
エンジニア	0.0	7.6	13.4	0.0	30.7	0.0	48.3
技手	1.3	14.8	17.5	4.1	52.8	6.8	2.7
旋盤工	3.6	23.6	29.0	18.4	7.2	18.2	0.0
小鍛冶工	2.1	34.2	22.6	22.6	4.4	12.7	1.4
電気技手	0.0	25.2	26.3	22.4	7.4	17.7	0.9
農業指導員	2.8	44.6	37.0	2.8	4.4	7.3	1.1
総 計	2.2	35.7	25.8	11.4	8.4	13.7	2.8

表5 「学校を修了したか」という問題に関する1969年コルホーズ青年の分布(%)

職 種	修了	不修了	職 種	修了	不修了
トラクター作業班班長	77.8	22.2	農業指導員	50.0	50.0
トラクター手	56.1	43.9	畜産作業班班長	55.6	44.4
コンバイン手	57.2	42.4	家畜番	52.1	47.9
コンバイン助手	51.2	8.8	馬丁	40.1	59.9
自動車運転手	56.9	43.1	搾乳・牛番	40.1	59.4
耕種作業班班長	56.6	43.4	総 計	58.1	41.9

表6 「現在も学習しているか」という問題に対する1969年コルホーズ青年の分布

職 種	学習している	していない
コルホーズ代表	14.2	85.8
トラクター作業班班長	9.6	90.4
トラクター手	2.2	97.8
コンバイン手	1.2	98.8
コンバイン助手	2.8	97.2
自動車運転手	2.1	97.9
機械手	3.8	96.2
耕種作業班班長	15.8	84.2
畜産作業班班長	—	100.0
畜産農場責任者	7.5	92.5
家畜番	2.2	97.8
馬丁	6.6	93.4
搾乳・牛番	2.4	97.6
文化・生活機関勤務者	9.2	90.8
雑役	3.9	96.1
農業技師	27.1	72.9
畜産学者	22.9	77.1
エンジニア	20.6	79.4
技術手	15.8	84.2
旋盤工	12.0	88.0
小鍛冶工	8.8	91.2
電気技手	4.4	95.6
農業指導員	6.2	93.8
総 計	24.6	75.4

畜産学者やエンジニアのような知識労働者のテクニックや高等教育学習の比率はきわめて高く、その主要部分であり、さらに、修了者も100%近くに達している。

以上からいえる重要な点は、直接農業従事者の専門的知識、修学の不足という点である。

次に大きな問題点として指摘しなければならないのは学習の継続に関する点である。第6表に見られるように学習継続志向はきわめて弱い。38年における学習継続志向は全体として学習継続=16.1%、学習不継続=83.9%であるから(表1参照)あまり改革されていない。しかし、行政管理者、専門職において比較的学習継続者の比率は高い。この問題点では、農村地域における専門技術学校の不足、家庭経済への従事、図書館の不備、官僚的

指導による妨害などが指摘できる。農業職業・技術学校で大量の農業カードルを養成できないでいる。その専門教育がメハニザートル養成中心（＝約90％）の狭い範囲に限定されていること、その他のカードルは都市の職業・技術学校で養成されていること、科学・技術革命のもとで農業カードル労働の急激な分化という状況におけるコルホーズの教育要求とのくいちがい、就業組織化の手工業性などのために、学習継続とカードル養成は必ずしもうまくいっておらず、コルホーズ青年の社会的発展にとって大きな障害となっている。とくに婦人は過半数が無資格手労働に従事するという現状である。

Ⅲ 「第4章精神的様相」について

この章では読書、クラブ活動、等について分析している。(1)読書について。読書量は専門性をもつ職種や教育水準と（69年段階でも）一定の比例関係にある。(2)図書館の利用に関して。69年には83.5％の青年が利用しており、38年の55.7％より前進している。コムソモール員における図書館不利用者は非コムソモール員の半分である。38年には女子の利用率は男子より15.9％低かったが69年には（82.4％、81.8％であり）格差はない。年令別利用格差は縮小した。教育水準、学習継続状況と利用率とは比例関係にある。社会主義的競争等への参加の積極性と利用率とは比例関係にある。(3)政治・経済学的文献の読書に関してもほぼ同じことがいえる。(4)諸サークルへの参加について。69年には全体的に参加の積極性が増大しているなかで特格的なのは政治・教育クラブの比率の高さである。年令別みると高年令層の方が積極性が高い。農業技術クラブは38年から69年にかけて教育水準的にも職種のにもより高資格的なクラブへと変った。(5)映画、演劇等に関して。社会主義競争等への参加者、コムソモール員、教育水準の高い青年はより積極的である。職種のちがいは大きな影響を与えていない。(6)文化・スポーツ生活。全体的な積極性の増大、用具等の普及の中で、職種や教育水準のちがいの与える影響はずっと小さくなり、都市生活に近接してきている。女性はまだ遅れが見られる。

Ⅳ 「第5章労働の能動性」について

第1表に見られるように69年には約80％のコルホーズ青年がまず仕事に満足している。この内容を詳しく見たのが表7である。(1)仕事に対する無関心層は年令、教育水準の上昇にしたがって減小してい⁽³⁾る。しかし、若年青年の仕事の満足度には問題がある。(2)高等教育者を例外として、教育水準上昇にともない仕事の満足度も上昇しているが、しかし、農村から流出して労働転換をしたいと考える青年の率も上昇するという傾向がみられる。(3)コムソモール員の仕事の満足度は高く、労働転換希望者の比率は小さい。(4)性的格差は大きくない。(5)職種別にみると、仕事に満足している青年の比率はメハニザートル＝74.7％、知識労働者＝71.7％、行政・管理機関労働者＝69.8％、畜産・耕種作業従事者＝60.6

表7 1969年の諸要因別の仕事の満足度(%)

		完 全 に 足	ま あ ま あ 足	無 関 心	や や 不 満 足	全 不 満 足
性						
男	性	69.0	12.9	7.4	6.5	4.2
女	性	67.8	13.8	9.1	5.5	3.8
年 令						
15	— 16 才	60.2	12.0	14.6	6.4	6.8
17	— 18 才	67.1	11.5	8.6	6.4	6.4
19	— 20 才	69.1	12.9	9.2	6.0	2.8
21	— 24 才	68.8	14.2	8.4	6.4	2.2
25	— 28 才	71.3	14.5	7.9	4.8	1.5
29	才 以 上	70.3	14.2	6.5	5.4	3.6
コムソモール員		69.5	13.4	8.4	5.5	3.2
非コムソモール員		65.4	13.3	9.2	6.9	5.2
教 育						
初	等	66.1	6.8	11.0	9.3	6.8
7	— 8 級	67.2	13.5	11.0	5.0	3.3
10	— 11 級	71.5	12.9	6.5	5.8	3.3
農業職業技術学校		71.3	12.3	7.0	5.9	3.5
中等専門学校		71.9	13.8	5.6	6.5	2.2
コース終了		76.4	11.2	5.2	5.0	2.2
高等教育		67.0	20.3	3.3	8.3	1.1
総 計		69.3	13.5	8.4	5.6	3.2

%, 雑役=54.4%, であり, 有資格な職種ほど満足度は高いといえる。(5)無資格職種者ほど不満は大きい, それは, 彼らが, 多くの場合, 高い教育水準にあり, 現在の仕事は農村で職業技術教育を受ける可能性が欠如しているところから出じた臨時的なもののみなしていることによって倍加されている。(6)他労働への転換希望を職種別にみると, 知識労働者=15%, メハニザートル=21.2%, 行政・管理機関労働者24.8%, 畜産・耕種作業=27.4%, 雑役者=37.4%, である。(7)社会主義競争への参加の積極性と仕事の満足度とは比例する。(8)仕事の満足度と転換希望との相互関係は第8表のようである。反比例的関係にある。(9)コムソモール員の仕事に対する満足度は非コムソモール員より高い。

次に生産に対する積極性に関して。

表1にみられるように38年には, 14.9%の青年がスタハーノフ運動参加者, 21.1%が労

働突撃隊員であった。男女の格差はあまりない。年齢が高くなるにしたがい労働突撃隊員も増加している。職種別にみると、労働突撃隊員に関してはメカニザートル、トラクター作業班長に多く、雑役者に少ない(19.7%)、スタハーノフ運動参加者に関してはコルホーズ代表、畜産作業班長(72.7%)に多く、雑役層に少ない(14.1%)。コムソモール員は平均以上に運動に参加している。これらのスタハーノフ運動参加者、労働突撃隊員は社

表8 1969年の仕事の満足度と転換希望との関係(%)

仕事の満足度	他労働に転換する希望があるか			もし「はい」の場合、農村流出希望と関係しているか		計
	はい	いいえ	わからない	はい	いいえ	
完全に満足	12.9	81.2	5.9	16.9	83.1	69.3
まあまあ満足	29.3	43.5	27.2	33.8	66.2	13.5
無関心	45.0	23.8	31.2	48.5	51.5	8.4
やや不満足	59.3	19.9	20.8	47.4	52.6	5.6
全く不満足	68.7	10.8	20.5	55.9	44.1	3.2
計	23.6	64.9	11.5	27.9	72.1	100

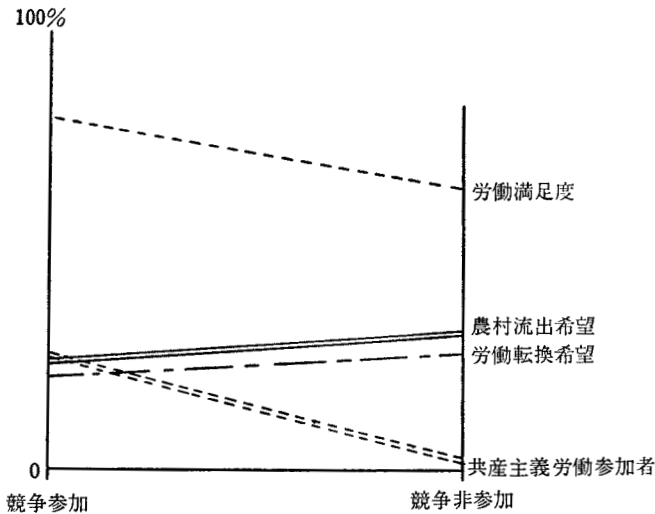


図1 競争参加別の労働満足度、労働転換希望、共産主義労働参加の1969年の分布

会・政治生活，社会やコルホーズ生産の管理において最も積極性を示している。

次に69年の調査をみると，57.1%の青年が社会主義競争に，14.4%が共産主義労働突撃隊に参加している。職種別にはメハニザートル，コルホーズ代表，畜産責任者などが多く，雑役層に少ない。年令や教育水準が高いほど参加比率も上昇する。さらに，社会主義競争や突撃隊参加と労働転換，農村流出希望とは図1にみられるように反比例的関係にある。これらの参加者は38年と同じように社会的活動への参加率も高い。

V 「第6章社会的活動」について

(1) コルホーズの管理諸活動への参加について。38年時点ですでに管理への参加は広範に見られるが大きな比率ではない。性別にみると男性が優越している（コルホーズ代表=57%，トラクター作業班班長=94.1%）。69年には青年の管理参加は約2倍に増大する。これらの青年層においてコムソモール員，共産党員の比率は高い。第9表に見られるようにコムソモール員の比率はかなりの大きさ（25才以下の共産党員はほとんどゼロ）であるが，69年には共産党員，コムソモール員の管理活動に対する参加は圧倒的である（第10表）。

表9 1938年，コムソモール員かどうかによる管理就業者の分布（%）

職 種	コムソ モール員	非コムソ モール員
コルホーズ代表	75.0	25.0
トラクター作業班班長	50.0	50.0
耕種作業班班長	51.9	48.1
畜産作業班班長	81.8	18.2
畜産農場責任者	45.5	54.5
会 計 係	60.0	40.0
文化・生活機関責任者	64.1	35.9
回 答 者 総 計	23.4	76.6

(2) 69年のコルホーズ全体会議，作業班会議への出席について。農業専門家やコルホーズ代表のように管理と密接に関係している職種層は比較的出席が良く，無資格でコルホーズ生産への決定的参加と関係していない雑役層などは出席が良くない。耕種作業班長の65.7%，畜産学者の67.6%，

表10 1969，党所属か否かによる管理就業者分布（%）

職 種	共産党員	共産党員 候 補	コムソ モール員
コルホーズ代表	38.4	15.5	30.7
トラクター作業班班長	29.6	33.3	50.0
耕種作業班班長	44.1	14.7	50.0
畜産作業班班長	15.7	10.5	64.2
畜産農場責任者	27.7	16.8	60.4
農 業 技 師	33.5	15.8	66.2
畜 産 学 者	29.4	20.6	67.2
エ ン ジ ニ ア	45.1	16.1	53.2
技 手	44.2	6.9	57.7
回 答 者 総 計	10.2	6.2	61.9

農業技師の68.4%，エンジニアの70.7%，技手の61.7%，コルホーズ代表の53.3%，トラクター作業班長の51.4%が頻繁に会議に参加している。他方、搾乳・牛番の50.2%，コンバイン助手の53.7%，トラクター手の48.5%，エンジニアの5.8%等が会議への参加ゼロ，雑役層は24%が2回出席，17%が1回，58.3%が出席ゼロという状況である。性別にみると男性の方が出席状況が良いが格差は小さい。労働への積極性（社会主義競争や共産主義労働突撃隊への参加）と会議への出席状況，労働に対する満足度と会議への出席状況は比例関係にある。

(3) 表1に見られるような社会的諸（委託）活動について。38年には88.7%の青年が不参加であった。男女の格差は大きくないが未解決の問題である。年令別にみると66.7%が

表11 社会的活動遂行に関する諸職種グループの青年コルホーズ員の分布（1969，%）

職 種	委 託 名			
	コルホーズ 理事会委員	監査委員会 委 員	班ソビエト 委 員	農村ソビエ ト代議員
コルホーズ代表	7.2	1.8	1.2	1.9
トラクター作業班 班 長	3.2	0.0	4.4	2.9
トラクター手	8.2	11.5	19.4	7.9
コンバイン手	5.6	9.4	5.8	3.9
コンバイン助 手	0.0	0.0	1.9	0.0
自動車運 転手	7.2	11.6	5.4	9.8
機 械 技 師	0.0	0.0	1.9	0.3
耕種作 業班班 長	4.8	0.0	9.5	2.4
畜産作 業班班 長	3.2	0.0	4.4	0.8
畜産農 場責任 者	7.2	3.8	1.9	2.5
家 畜 番 丁	1.6	1.8	3.2	1.4
馬	0.0	0.0	0.6	1.2
搾 乳 ・ 牛 番	8.2	7.5	4.4	18.2
文化・生活機 関労働者	3.2	7.5	0.6	12.9
雑 役 層	4.8	13.2	10.4	8.6
農 業 技 師	11.2	7.8	3.2	6.4
畜 産 学 者	7.8	1.8	3.8	3.9
エ ン ジ ニ ア	6.4	3.7	0.6	3.6
技 手	4.6	5.6	3.8	3.9
旋 盤 工	1.6	0.0	1.2	1.1
小 鍛 冶 工	2.4	3.7	3.2	0.3
電 気 技 師	0.0	3.7	2.6	2.2
農 業 指 導 員	1.6	5.6	6.6	3.9
回 答 者 総 計	4.2	2.2	5.2	10.2

23才以上である。職種別には、行政・管理者、メハニザートル層の参加が積極的で、畜産・耕種・雑役労働者の参加は平均以下である。

(4) 69年になると社会的活動への参加はさらに積極的になるとともに、班ソビエト員、農村ソビエト代議員、人民監視員、同士裁判員、その他の臨時的依頼等の役割が出現している。

(5) 先進的役割はコムソモール員が果しているが、38年時と比較すると69年には非コムソモール員の積極性は増大し両者の格差は縮小した。しかし、コルホーズ理事会委員、監査委員会委員をのぞくと、他の活動ではコムソモール員の参加は圧倒的である。

(6) 職種別にくわしく社会的（委託）活動への積極性をみると第11表のようである。コ

コムソモール 委員会委員	人民監視員	同志裁判所 委員	臨時的委託	他の委託	回答者総計
0.3	1.4	0.0	0.4	0.0	0.3
1.3	2.3	1.4	0.6	1.5	1.0
13.2	15.9	12.6	14.9	7.8	16.0
2.5	5.8	3.4	3.2	2.3	3.2
0.3	0.3	2.2	2.7	1.7	1.6
13.0	13.6	12.6	11.8	9.4	12.0
0.7	1.4	0.0	1.4	0.9	1.1
1.2	3.4	4.5	0.9	0.9	1.0
0.9	1.2	1.4	0.4	0.9	0.8
1.3	1.9	2.2	0.9	9.0	1.2
1.2	2.3	11.4	4.2	0.9	3.0
1.2	0.3	2.2	0.7	4.9	1.0
14.2	8.5	6.8	13.1	3.9	14.2
18.5	8.9	9.0	10.5	22.0	9.2
11.3	7.7	5.3	19.1	15.8	19.4
3.9	5.4	3.4	1.5	3.9	1.7
4.2	5.4	3.2	1.8	3.9	2.0
0.9	3.5	2.2	0.3	2.3	0.8
2.3	1.9	0.0	1.2	3.9	1.2
0.7	1.9	0.0	1.1	0.0	1.0
1.1	1.9	3.4	2.9	4.7	2.3
2.7	2.5	6.8	2.0	3.1	2.0
3.1	2.6	6.0	4.4	6.2	4.0
18.5	9.1	3.3	42.8	4.5	100.0

ルホーズ管理関係者とメハニザートル層、雑役層が積極的に参加していることが示されている。

これらの点はコルホーズ員グループ内部における社会的同一性への傾向の表われである。

(7) 党员、コムソモール員の活動について。第12表に見られるように、この間に共産党员、コムソモール員とも大きくふえているが、性別には女性共産党员の遅れが指摘される。教育水準の点では、38年においては圧倒的に準中等教育以下であったが、69年にはそれは $\frac{1}{2}$ となり中等教育、高等教育の比率（コース=13.2%、高等教育=2.9%、テクニクム=11.4%）が増大した。職種別にみると、38年にはメハニザートル層にコムソモール員

表12 1938, 69年調査による性別党所属分布(%)

	1938年						1969年		
	党員	党員候補	同調者	コムソモール員	コムソモール員候補	党員	党員候補	コムソモール員	
男性	—	—	—	29.5	0.8	13.7	10.5	58.7	
女性	—	—	—	16.6	0.3	5.4	5.8	61.6	

表13 1938, 69年のコムソモール員の社会的活動遂行状況分布(%)

社会的活動	1938年	1969年
コムソモールオルグ、コムソモール委員会秘書	100.0	} 90.8
コムソモール委員会委員	100.0	
コルホーズ理事会委員	53.4	48.8
作業班ソビエト委員	—	60.0
監査委員会委員	73.4	46.0
農村ソビエト代議員	—	68.9
壁新聞編集委員	65.2	—
人民監視員	—	60.0
労働組合オルグ	40.0	—
ピオネール指導者	94.6	—
宣伝者	61.6	—
同志裁判所委員	—	61.2
国防飛行化学建設隊委員	50.0	—
臨時委託	—	72.9
他の委託	—	58.4
回答者総計	23.4	61.9

が集中しており、家畜番、雑役層などには平均以下であったのに、69年にはメハニザートル層への集中はかわらないが、その分布はより全面的なものへとかわっている。コムソモールの社会的活動遂行状況は第13表にみられるようにきわめて積極的である。

VI「第7章物質的、文化・生活状況」について

この章では主に物質的状态の改善に関して分析されている。

(1)社会化経営からの収入は、ルーブル価値の変動という条件つきでも、大きく増大した(第14表参照)。(2)社会化経営からの現物収入は、38年から69年にかけて穀物に関しては増大、馬れいしょに関しては減小、野菜はほぼ変わらずという状況であるが、穀物収入ゼロ(24%)の含意は全くちがひ、38年=穀物不足、69年=貨幣収入増大という意味をもつ。(3)労働日に関していうと、年齢が高くなるほど、社会主義競争等への参加者であるほど労働日は多い。(4)男女間の収入格差は大きくないが、職種構成格差にともない69年にもまだ残存している。(5)職種別にみると、38、69年ともメハニザートル層、ついで畜産労働者が高収入を得ている。しかし、69年にはエンジニアや諸専門家の中でメハニザートルよりも高い収入を得る職種も出現してくる。低収入職種は雑役層である。(6)労働に対する満足度や労働転換希望、農村流出希望と労働支払い額とは直接的関連は見られない。労働転換等の希望は主要には他の(労働の内容、文化・生活状況、教育制度等)要因による。

表14 社会化経営からの収入(ルーブル)(%)

	1937年	1968年
0	20.9	3.4
50 まで	12.0	
51 — 100	11.6	7.1
101 — 150	8.1	2.8
151 — 200	6.5	1.3
201 — 300	—	2.1
201 — 500	22.6	—
301 — 400	—	3.8
401 — 500	—	6.4
501 — 700	—	15.7
701 — 1000	—	31.0
501 — 1000	10.9	—
1001 以上	7.4	—
1001 — 1500	—	21.3
1501 以上	—	5.1

Ⅶ 「第8章コルホーズ青年の社会的特徴づけの要因としてのその社会・経済的配置」について

この章では調査対象諸州間の諸発展水準が比較され、次のことがのべられる。

(1) この期間に、教育、文化、労働積極性等で大きな発展、変動が生じ、調査各州のコルホーズ青年の格差を把握するのは困難になってきた。いくつかの指標において格差も存在するが、それは、二義的格差である。

Ⅷ 「結論」について

以上の諸章をまとめて次の諸点が調査結果から結論づけられる、としている。

(1) コルホーズ青年は、職種構造の変革、教育水準の向上、知識労働の増大、物質的条件の改善等により、都市の工業労働者に大きく接近した。しかし、職業・技術養成に関して大きな問題点が存在する。

(2) コムソモールの役割はますます重要になっており、その管理への参加や労働の積極性の向上での指導的役割の強化は重要な問題である。

(3) 新しい社会主義的、共産主義的人間の成長がみられる。

Ⅸ 調査、調査結果分析に対する若干の感想

まず、この「回答」、回答分析結果を無条件に前提できるのか、という問題がある。38年はいわゆる「スターリン粛清」の時期であり、あらゆる組織において大きな変動、動揺があったことは想像しうる。しかし、この分析では、スターリン時代に強く関係する問題については避けて、より一般的な状態の分析にとどまっているようである。(この点は最初にも若干ふれた)。

次に、分析結果を全面的に正しく示し得ているか、という点では問題は残る。たとえば、社会的(委託)活動におけるコムソモール員と職種との関係が絶対的、相対的に数値表示されずに、あまり意味のない(実態を意図的に隠した?)図(原文の17, 18)で示されるなど。

次に、この調査がコルホーズ農民において最も先進的層と云いする青年を対象にしたものであることを確認しておく必要がある。中山弘正氏が綿密に示された、コルホーズ農民の中でのこれら「エリート層」と中高年層や婦人層を中心とする膨大な底辺層の存在、その階層性については、この本では全くふれていない。(しかし、これら青年層を中心とするコルホーズ農民の変動は底辺層にも大きな影響を与えていくことは不可避であろう)。

さらに、社会学的分析と関連した問題点とでもよびうるいくつかの問題点がある。

(1) 調査対象となったコルホーズの経済的状態、ソ連邦農業におけるその位置、コルホーズの発展と青年層の発展との関係等、が考慮されていないこと。したがって、調査結果をただちに現代ソ連コルホーズ青年の変動と一般化することはむずかしい。

(2) アンケート設定のし方に問題があるのであろうが、社会学的分析と経済学的分析が十分に結合されていない。たとえば、青年の学習継続がきわめて低いという問題点は、(労働日の分析のみで)労働時間の実態に対する調査が欠如しているため、十分解明されていない。

以上のような諸問題点をもちながらも、きわめて多くのコルホーズ青年を対象にしたこの調査は興味あるいくつかの点を示していると思われる。

第1点はコルホーズ青年のあり方に関してである。周知のようにわが国においては中山弘正氏によって、現代コルホーズ青年層は「位階制的職種階層構造」のもとで都市志向＝農村流出を希望する層として把握され、メハニザートルを中心とするこれらの農村基幹労働力の農村流出によって、ソ連農業は被保護産業から脱却できないとされているのであるが、その点に関してである。

(1) 回答の正しさを若干の留保をすとしても、上に示された労働満足度、労働転換希望度、農村流出希望度の数字は中山氏の論理と大きなへだたりがある。

(2) 以上の点に関する限りメハニザートル層は比較的安定した層である。

(3) 労働転換、農村流出希望の大きいのは教育水準点でみると高等教育者、初等教育者に多く、この点を調査分析は教育水準と職種との不一致、職業・技術準備教育の不整備の結果ととらえており、いわば都市と農村との格差の残存という視角から把握しているといえよう。いずれにしてもコルホーズ青年層を都市志向という面だけで捉えようとするのは、この調査結果が示す像とは一定のへだたりを示していると思われる。

第2点は農村における主体形成に関してである。同じく中山氏はソ連における労働力編成の特徴として「位階制的職種階層構造」、とくに位階制を強固に支える共産党の存在をあげるのであるが、この点について。

(1) すでに見たように、コムソモール員と非コムソモール員、教育水準の高い層と低い層、有資格労働者層と雑役労働者層等が一定の相互連関をもちつつ、一定の階層性を形成していることはこの調査も示すところである。しかし、その評価は全く逆であり、調査分析においては、30年間の階級構成変動の前進的側面として評価されているのである。

社会主義革命によって一揆に社会主義的人間、集団、階級を創出することはユートピアである以上、問題は位階制の内容、その変動のあり方がどうなのかということになろう。この点を調査分析は、教育水準の全般的向上、教育水準と職種との直接的関係がなくなってきたこと、労働の積極性に関して非コムソモール員の態動性が高まり、格差が縮小した等によって、コルホーズ青年内部の均質性が進展しつつあることを証明しようとしている。

(2) コムソモールについて。共産党の単独的存在と結合された、多様な青年組織の欠

如、コルホーズにおける民主主義的諸権利や伝統の実質的弱体性のもとで、コムソモールの「先進的」役割とは実質的にいかなる意義をもちうるか、という点はたしかに問題である。しかし、他の重要な側面は、69年の調査対象者の約60%がコムソモール員となってきたこと、彼らは総体的に高い教育水準、有資格労働、高い労働態動性や社会的活動への積極性をもっており、民主主義的状况の発展、効率性と生産性の向上に強い要求をもつ側面を不可避免的に備えていく階層である、ということである。

以上の点をさらに深く全面的に分析するには、これらの社会学的分析に経済学的、政治学的分析の結合が必要であろう。

注

- (1) 池上 惇、「主体形成論」と自由の問題、「唯物論」、1979年5月、59ページ。
- (2) ソビエト教育制度に関する川野辺敏氏の解説によると、現行のソビエトの学校制度は下図のようである。まず、義務教育年限については数回の延長が行われており、1930年代の4年制、1949年からの7年制、1959年からの8年制、1977年（に改訂された新憲法により）からの10年制へと変化した。次に現行学校制度の基幹は1930年代につくられた制度であるが、当時は①4年制の小学校、②7年制の準中等学校、③10年制の中等学校、という年限であり、現在と若干のちがいがあある。最後に、義務教育10年制にともない後期中等教育に問題が生じている。普通教育第8学年終了者のうち3/4は中等学校の第9、10学年へ、残りの1/4は職業技術学校や中等専門学校へ進学する。職業技術学校で養成する職種は約1100種、年限も1～3年となっているが、義務教育10年制にともない、中等学校に準じた一般教育をも与える、2年以上教育する中等職業技術学校の建設の方向が出され、実施されつつある点である（川野辺敏、「ソビエト教育制度概説」1976、「ソビエト教育の構造」1978、「ソビエト体制と教育」1979）。
- (3) 以上の点に関して他の調査結果も引用されているが、その内容は次のとおりである。(a)著書「コルホーズ員集団」におけるオルロフ州の3コルホーズの1963-69年の調査結果によると、78.5%の被調査者が仕事に満足している。(b) П. И. シムシュによると、白ロシア、スタプロポーリ地区、ボロネジュ、ヤロスラフ州のコルホーズにおいて仕事に対する不満足者は4-20%である。(c) 1967-71年にかけてコムソモール中央委員会農村青年部、モスクワ大学哲学学部科学的共産主義課社会学研究実験所によって実施された調査結果によると、「都市へ移住したいか」という質問に対して農村青年の答は(%)「はい」=29、「いいえ」=44、「わからない」=23であった。(d) 年令の上昇とともに仕事の満足度も上昇する点は И. Т. レビキンによると、1963-67年のオルロフ州コルホーズ、ソフホーズの調査結果や、「コルホーズ員集団」においても証明されている。

現行学校制度図

現行学校制度図

